

Title	<書評・紹介>青山博士古稀記念宋代史論叢 同論叢刊行會編
Author(s)	梅原, 郁
Citation	東洋史研究 (1976), 34(4): 625-633
Issue Date	1976-03-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/153601
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

青山博士古稀紀念宋代史論叢

同論叢刊行會編

昭和四十九年九月 省心
書房 A5版 四八七頁

私が青山先生の學恩を受けるようになったのは、大學で中國史專攻を志した時に遡る。あの『讀史方輿紀要』の索引は、講讀や演習でいかに役にたったことだろう。

昭和三十二年、東洋文庫に宋史提要編纂協力委員會が設けられ、東京は青山先生、京都は佐伯先生が Sung Project の日本における實質的推進者となられた。宋を主要研究分野に選んだ私は、爾來二十年近く、先生の漕運や官僚制に關する御研究を通しては勿論のこと、Sung Project の各種事業においても、御教導をいただくことになった。

先生の古稀を紀念して、日本の中國史學界では例の少い、一つの「時代」を共通對象にした論文集が刊行されたことは、長年に亘る先生の宋代研究への御貢獻を考える時、誠に適切で意義深いものであろう。實は、私も論文集の末席に連ならせただくつもりであったが、やむを得ぬ事情で延引し、遂に辭退申し上げざるのやむなきに至った。青山先生はいうまでもなく、御迷惑をかけた編集の諸

氏に深く、お詫びする次第である。論叢ができあがると、主編の山根幸夫氏から、論文がだめだったからせめて書評を、との御慫慂を受けた。執筆もできなかった者がいかがかと躊躇したもの、青山先生の學恩の萬分の一にも報いることができればと思い直し、ここに無辭を連ねさせていただくことにした。

本書に收録された論文は全部で十八篇、我國の宋代史研究の中心メンバーを網羅し、さらに Princeton の劉子健、臺灣の宋晞兩先生の論考を加える。内容もバラエティに富み、こうした記念論文集にありがちの原稿の枚數制限が緩やかであったため、各篇が量的にも充實していることが特長的である。各論文は著者名五十音順に排列されているが、ここでは主題別に分け、紹介を兼ねた若干の感想を書き綴ることにしたい。

政治制度、官僚支配に關しては次のような論考がある。千葉瑩「宋代の後妃—太祖・太宗・眞宗・仁宗四朝—」は、自ら「宋代後宮物語」と言われるように、宋初四代の皇后以下、各妃嬪について、その略歴、國家財政とのかわり、外戚の系譜などを克明に述べたのち、北宋前四朝の中で最も國政に預った眞宗劉皇后に筆をさかれている。氏は、宋で皇后、外戚の患がなかったのは、完備された官僚機構のため、天子自身さえ思い切った行動に出られなかった均衡と制約の網の目があったからではないかと考えられている。宋代の史料を讀む時、どの妃嬪がどの天子と關係するのか、なかなか覚えられない。氏の作業はそのために有難いものだが、南宋末まで完成された段階で、もう少し判りやすい表にしていただけではと虫の良いことを考えている。また宋の皇妃は多くの場合、それほど上流の階級から出ていない共通性も、この時代の皇帝權の性格と深

い繋りがあり、そうした點の一層の追求が望まれる。

宋晞「宋代的宗學」は、宋の文治主義の基礎に教育の普及をあげた著者が、皇族の教育機關に宗學について詳細に論じた一篇である。宋代宗學の興廢については次のようにまとめられている。諸王宮の教育所に官學は、宗子の増加とともに次第に整備され、英宗時代に宗學の雛型ができ、神宗の時代に集大成される。北宋の宗學は徽宗の時代最も隆盛となるが、靖康の變で、宗室が殺害あるいは北方に拉致されて衰える。南宋は臨安で宗學の再興をはかったが進歩せず、紹興十四年になって漸く小規模のものができたが、建物を作られたのは數十年のちの寧宗嘉定九年であった。また、北宋後期から、宗室は、開封の太宗系、西京洛陽の秦王廷美系（西外）、南京應天府の太祖系（南外）の三系列に分けられたが、西外、南外にも宗學が設けられ、南宋になると福州の西外、泉州の南外がかえって盛んであった。ついで著者は、宗學の最盛期に制定された『政和學制』を中心に、宗學の組織、内容を解説したあと、宗學出身者の任官の問題、宗學の學風が、宋初の眞摯さを次第に失い、墮落、形骸化することに觸れられる。宗學の概略はここに描きつくされているが、宋の皇帝權の宗室に對する基本的姿勢の推移を含め、なぜ、とりわけ南宋で趙氏一族が官僚としても活躍するようになったのか、彼らと宗學とが具體的にどのように關係するのといった問題が残っているであろう。

劉子健「略論宋代武官群在統治階級中的地位」にうつらう。氏はまず、重文輕武の宋の風潮が、研究にまで反映していることを指摘し、軍事史を獨立させ、それ自身の系統的研究の必要性を提唱される。この論文は、その主張の一つの試みと言えよう。そこで、輕視

されている武官群は、彼ら自身統治階級の一員ではないか、文官から加えられる蔑視が、武官を不正行爲に追いやり、兩者の溝をさらに擴げるのではないかと問ひかける。前者については、南宋ははじめのような特別な時期には、平民出身の武官もあるが、おおむね、文官になり得ない統治階級の出身者が武官となる。また武官・武資を手に入れると、出自來歴に關係なく、統治階級の一員となってしまう。武學も官員になる一手段にすぎず、武藝の能否は二義的な意味しかない、といった説明が加えられる。一方、後者については、服裝でも武官は平民に優越せんとし、士大夫を模倣し、さらに機會あれば文官へののりかえ（換資）をはかると指摘する。また、武官は自己の職務に安心没入できず、その裏返しとしてさまざまな惡事に走るとして、彼らと商業、營利行爲の關係に説き及ばれる。氏の結論は、儒學の理想は尙文尙武であるにも拘わらず、宋の士大夫は、仕途を兩分し、武官群を抑制することで統治階級内部の矛盾を造成した。士大夫は武官を攻撃するのみならず、自らの利益のために武官を利用したので、宋の國を誤ませたのはむしろ士大夫である、ということにならう。我國においても、唐宋五代と、武人支配の萌芽がありながら、なぜ、宋の文官支配に轉化したかが、一時間問題にされたことがある。確かに我々は、無意識に文官の立場から宋の諸問題に近づき、その眼鏡でしか武官を見ていない。劉氏の指摘される視角を十分とり入れて今後の研究を進めなければなるまい。

古垣光一「宋眞宗代磨勘の制の成立について」は、官僚制の中で重要な意味を持つ考課の一問題を扱った論文である。宋初から考課と同義に使用されて來た磨勘の制度が、それまで郊祀の恩典であった遷官―寄祿官の敘遷―に代って登場する過程を論じ、京朝官磨勘

の制の成立は、宋の建國期から安定期移行を象徴する一つの改革であり、また磨勘の際、天子の引見が行なわれたことは、皇帝權の黜陟への新たな介入を意味すると説かれる。宋に入って頻出する「磨勘」という言葉が氏の言われるように「考課」と同意義かどうか問題がある。さらに、郊祀の恩で單に官秩の遷轉を行うのではなく、磨勘（考課）という作業、さらに天子の引對をへて官秩の黜陟を行うように變つたと言われても、肝腎の京朝官磨勘法の具體的内容について十分な説明がないのは不満である。氏が扱っておられる問題は私も現在關心を寄せている分野であり、いづれ論文の形で私見を述べさせていただくとして、氏の銓選用語の概念規定に不安が感ぜられることだけをつけ加えておきたい。

伊原弘「南宋四川における吳氏の勢力」は、南宋の前半期、四川最大の權力集團であつた吳氏を対象に、とりわけ、創建者吳玠と吳氏を破滅に導いた吳玠との中間に位置する吳玠と吳玠に焦點をあてて論じている。異民族と境界を接する地帯で、吳玠・吳玠と有能な武將が續いた吳氏は、武將たちの兵力を吸収し、軍、民、財政を握る大きな權力者となつた。しかし、吳玠の死後、宋朝は軍閥の分割、移動など、吳氏の機能低下策をとり續け、吳氏配下の武將たちも私的關係を消滅させて、宋の政治機構内での官僚的關係へ變化する。さらに四川内部の出身者にも、宋朝の意向を受ける者があらわれる。四川の人士は吳氏を四川の防衛者と意識していたが、宋朝の政治機構にも深く依存しており、これを十分認識しなかつた吳氏は失敗の道を歩んだ。吳氏をはじめとした南宋の軍事集團と中央との關係をどのように構造的に把えるかは重要な研究テーマである。伊原氏の論考はその一つとして注目すべきものであるが、氏の使われ

る「四川」という地域の枠に、まず自分は疑問を感じる。吳氏が一應の勢力範圍を設定し、灌漑を整え民情の安定を計つた地域は何よりも漢中であり、東西兩川という四川の中心地域とは直接には結びつかない。宋朝との關係は勿論であるが、四川内部での吳氏の位置づけを、もう少しいろいろな面から突っこんで調べる必要があるのではないだろうか。なお、吳玠墓誌銘の漢中の水利を述べる引用原典には、かなりの誤讀がみられることを蛇足ながら申し添える。

次に財政・商業關係に眼を轉じよう。「鹽法については二つの論考が寄せられている。河上光一「宋代解鹽の生産と生産形態」は、解鹽の生産地―解池の立地條件、水害や盜賊防止の堤防、水路の整備、鹽池内部の畦畝の實態、製鹽の方法などを詳論したのち、製鹽労働者―畦戸をいろいろな角度から分析される。この論文の前半は、清の『河東鹽法志』や地志類を使って宋代の史料を補強し、鹽池の實情が明確に描き出されている。これに、元を中心とした碑傳類、「利病書」引用の地志などがつけ加われれば、一層完全なものとなる。ところで、直接生産者―畦戸を扱っておられる後半部には、若干の疑議なしとしない。大勢として、國有鹽田で國營生産に強制的に従事させられる――一應の給料と免役の特權は與えられるが――畦戸が、次第に専門化した雇傭労働にかわる。こうした雇傭労働者は最初は私的人格を帯びていたが、次第に國による雇傭という公的人格を強める、と述べられている。私はその論證過程にかなり疑問をいだく。河上氏は、最初、臨時的にあらわれた、場官個人による私的な雇傭労働者―補種人が、天聖五年以後公的な性格に變つたとされる裏付けに、次の史料をひかれる。（前略）解縣安邑縣兩場、所種鹽貨有折欠、不願侵欺盜用者、場官自備人功、許令補種少

關、蓋苦值霖雨、依舊消折、歲月滋久、別生欺弊、欲望自今補種到鹽、旋交與監官專副管係、從之（宋會要食貨三）。河上氏は、この年現場官の上級者である監官專副を管係させたというから、補種人の性格は、私的労働者から、監官專副も管係する公的性格に変わったことが判ると言われる。しかし、この原文の意味は、補種によって作られた鹽は、不正防止のため、ただちに監官と專副（胥吏）に交與して管理責任を負わせるという内容で、補種人の歸屬に關係するものではない。同じような例は、ややあとに引用されている、天聖九年九月二十四日の宋會要の記事に關してもあてはまる。ここでは、種造節級が補種人身分と呼ばれることにより、雇傭労働者が公人であることを明示している、とされるが、私見では、原文は一旦歸農した者を再び補種の節級とすること、別に補種人の身分（各人割當分）の生産鹽については年額を立てないという二つの事柄を述べているように受取れる。河上氏は「雇傭労働」という概念に少しとらわれすぎ、それを無理に史料の中から抽出されようとしてすぎるのではないだろうか。

「北宋の東南地方に於ける官賣法下末鹽鈔制度の成立について」幸徹は、氏が營々として築いておられる東南鹽法に關する新しい一篇である。長江下流域を中心とする東南地方では、太宗の至道二年より徽宗の崇寧元年までの百年間、一貫して官賣鹽法が實施された。しかし、國家管理主導的な官賣法體制下において、それと矛盾する、商人の活動の餘地がある末鹽鈔制度が存在していたので、この論文はその成立に焦點をあてている。この制度は、末端における官賣法の不備を補足するため、まず東南現地で誕生し、眞宗末の天禧元年よりは、中央財政を擔うものとして京師發行方法が創設さ

れ、大發展を遂げるようになったと説明されている。限定された史料をあらゆる角度から舐めるように検討し、論旨を組立てられてゆく幸氏の方法には賛嘆のほかないが、こまかい點に入つてゆくとかなり疑問がある。こうしたテーマは、制度の裏に潛む商人集團のあり方、それと對應する政府や官僚の動きと不可分に關係しており、北宋のこの時點では、さらに軍糧の調達、漕運と鹽法の相關關係なども加わる。少くともこれら要素を十分に織りこまないと、制度の表面的流れの解釋に陥る危険があらう。方向としては幸氏の論じられる通りであらうが、何せ「鹽法」はむづかしいという恐怖感がある上に、氏の表現が、漢字の多い個性的なものであることも加わって、十分内容をつかみきっていない點を御記びする。

斯波義信「宋代市糴制度の沿革」は、南北宋三百年間の市糴制度を通觀し、問題の所在を指摘した力作である。斯波氏によれば宋代の市糴法は次のように位置づけられよう。從來救荒と物價調節を目的とした傳統的內政政策の市糴制度は、安史の亂以後、特に邊境の軍餉調達と結びつき、新しい意味を持つようになった。北宋時代には、交通、生産性の劣る西北邊境に七・八十萬の大軍が駐在したため、輕量で市場性の高い物資を邊境で放出し、商人勢力を誘致して現地調達がはかられた。便糴、博糴、三說などの諸法がそれだが、これによって豪商が勢力を握り、專賣制の破綻、財政危機を招いた。結局軍餉問題の解決は、民戸の餘剩を合理的手段で買上げる和糴に求められた。和糴は河東などで早くから行なわれていたが、北宋末全國で施行された均糴法で次第に強制賦課の色彩を帯び、南宋に入ると軍餉調達を支える附加税化してしまふ。氏はこうした大筋に沿って、市糴關係の殆どすべての史料をふまえ、個々の糴法の實態、

その軍餉とかかわりを簡潔に要領よくまとめられている。氏自身、この作業は今後の詳細な事實研究の基礎と言われているが、宋の財政問題を研究する者は、これによって多大の恩恵を蒙ることであらう。

趙祥義「南宋時代の市舶司貿易に關する一考察——占城國の宋朝への朝貢を通して見た——」は、比較的研究の少なかつた南宋時代の市舶貿易、とりわけ貿易形態を扱った好篇である。氏はまず、建隆元年から淳熙三年に至る七十數回に及ぶ占城國の對宋朝貢表を作成され、北宋にくらべ南宋に朝貢回数が激減したことを認めつつ、南宋における市舶司貿易の重要性の増大と一見矛盾するこの現象は、政府間の公式貿易が、商人たちによる民間貿易にとつて代られたために他ならぬと説明される。さらに朝貢使者の分析から、北宋では、市舶貿易の主導者がイスラム教徒であつたのに對し、南宋に入ると、中國商人が登場し、中國海上商人の著しい進出によつて、イスラム教徒の商人たちは、その地位をとつて代られつつあつたと述べられている。南宋時代、南シナ海を舞臺に、海上貿易が飛躍的に發展していたことは紛れもない事實であるが、その中味には不明な點が多い。この論文は、そうした方面の研究へ一つの足がかりを築いたものと評價できよう。

次に水利關係にうつろう。中村治兵衛「王安石の新法と千倉渠」は「乾隆濟源縣志」卷六に收める、北宋熙寧三年制定の「千倉渠水利奏立科條碑記」にもとづく灌漑水路の具體的研究である。千倉渠は京西北路五州の濟源縣（現河南省）の王屋山に發源する濟水の最上流に位置する。王安石は新法の農田水利事業の一つとして、彼の部下の陳知儉を使って、水路が塞り、あるいは大姓による水碓利用

などのため機能を低下していた千倉渠を復活し、規約を作つて有效な運用をはかった。この碑記にはその経緯と十ヶ條に及ぶ用水規定をする。中村氏は、これを數少い北宋中期の具體的な用水規定として、逐條詳細に説明紹介される。規定は、水源と流路、用水、罰則に大別され、用水の規定は、閘、水門の開閉と管理、用水區域、配分方法（時間配水）、用水の管理機構に分けられる。氏の言われる通り、ここは黄河の北の稻作地帯であり、大まかであるが、こうした灌漑規定の實例をみることができるのは注意すべきである。ただこの渠はあまりに小さく、他の地域との比較研究が行なわれることを期待したい。なお、水利規定第五條の(5)以下の讀み方を、中村氏は「閘を開く毎に稻田人戸の狀をとり、實際に水を用いないかどうかを係官に監視させる」と、「稻作農家にむだな水をためておく堤防修繕の義務を負わせる」と、「今後稻田を造成しても、灌漑用水磨用としての水量をふやさぬ」の三項に分けて説明しておられる。私は原文の「方得開閘」と「仍候云々」の間で段落を切り、「これから先、人戸が堤塘を修築することによつて、無用の水をたくわえて、稻田を増置できる」と「さすれば開閘しなくて、水磨の使用にあてられる」と讀むのではないかと考えている。

長瀬守「宋代江南における水利開發——とくに郵縣とその周域を中心として——」は『四明它山水利備覽』をもとに、寧波郵縣の東西計十四郷の水利開發を扱っている。它山水系に依存する西の七郷については、用水路の泥沙閉塞の對策、淘沙工事、溉田のネックとなる堰と閘、堰（石のいぜき）などをとりあげ、その内容、築造經費、管理機構を史料に則して述べられる。また東の七郷は東錢湖の水を利用して、湖の浚治經營が跡づけられている。氏は

鄞縣の郷村は宋から清に至るまで一貫した傳統の中に共同體的生活が繼續され、水利開發に際しては、郷村の有力戸（郷帥、大卿）、道觀などが核となり、官は郷村の枠組を利用し、郷村の民力を包みこんだ公權の立場で水利事業の成果をあげようとしたと結論づけておられる。私には水利、灌漑の研究において「共同體」という言葉が安易に使われ、何でも「共同體」に結びつけなければという姿勢が固定化しているように思われる。長瀬氏の論旨そのものは暫くおくとして、氏が各節で指摘される水利共同體の基軸の郷帥あるいは郷村の大卿が、果して郷村の有力戸なのであろうか。『它山水利備覽』に出て来る、郷帥陳大卿、郷帥余大參、帥黃大卿は、それぞれ司農卿陳璘、參知政事余天爵、司農卿黃壯猷、つまり南宋末期の中央政府の高級官僚で、四明と關係のある人々ではないのか。水利事業を彼ら有力者たちの示唆に托し、それを魏唄が實行に移すというのが、この書物の基本姿勢であり、少くとも直接には彼らが郷村水利の基軸になる有力戸と言うことはできない。水利事業の個々の内容は長瀬氏の説明される通りとしても、「共同體」の構造には再考の餘地があろう。

青山先生と關係深い漕運については、橋本紘治「南宋における漕運の特殊性について——北邊の軍糧調達における漕運の役割——」がある。ここでは、まず漕米の額とその運搬地を史料に則して説明し、南宋漕運における軍糧の占める大きさを確認される。次にそうした漕運の組織、とりわけ實際に船圖を管理する人たちを、牙人、武官、土豪、客商などに分けて調べ、南宋の漕運が、客船の使用と相俟って民運の傾向を強めたと述べられる。南宋は國都臨安が水稻生産地の中心にあったため、そちらへの漕運は小規模であったが、

金軍防備のため揚子江沿岸に配した大軍への軍糧輸送が多額に上り、それが南宋の漕運の性格を規定するというのが氏の結論である。南宋の漕運は、中央政府と軍事集團、その兩者に絡みこむ商人、官僚のあり方などを解きほぐして、はじめて生きた姿が現れるであろう。氏の論文は率直に言ってまだ史料の表面から離れられず、論旨の進め方もまっとうにすぎる。もう少しダイナミックにいろいろな視角から問題を掘り上げていただきたい。

日比野丈夫「北宋時代の京東路」は、國都開封と京東路を結ぶ廣濟河（五丈河）水運の興廢をその歴史地理的背景とともに跡づけ、廣濟河と密接にかかわる京東路の商業繁榮の理由を海上交易に求め、神宗から哲宗時代にかけての密州板橋鎮市舶司の推移に論及される。廣濟河の維持、板橋鎮市舶司の開設について、中央ではいつも相反する意見がみられる。これは新舊朋黨の争いというより、汴河漕運第一主義による南方偏重政策と關係があり、こうした姿勢が、積極的な北方振興策をうちたてえず、北宋の運命に決定的な影響を与えたのではないかと言われる。京東路はこののちも、劉豫集團から李壇集團と、異民族勢力下において政治、經濟的に問題の多い地域である。日比野氏の論考に含まれている幾つかのヒントを咀嚼しつつ、京東路の地域研究の深化が行なわれるべきだと考える。

佐竹靖彦「宋代贛州事情素描」は江西省南端の難治の區として有名な贛州（虔州）の持つ特異な性格を、統一的な地域像として、歴史の展開の中で位置づけたとした野心作である。まず、唐から宋への注目すべき現象として、大量の流民の流入と、その受容を可能にした少数民族社會の最終的解體過程をあげ、それに對應する新しい民族・階級の矛盾、少数民族を中心とする政治勢力の結集を想定する。

その裏付けとして、氏は、唐末五代におけるこの地方の土豪と夷獠の關係、流民の定着を可能にしたこの地方の灌漑水利のあり方、少數民族と漢族貧民（流民）の結びつきなどをあげられる。氏はさらに、鹽の密賣を中心とする特異な商業集團——贛商に筆を進め、當時のフロンティアに見られる民衆叛亂の共通性格をまさぐられている。佐竹氏の構想の底には、客家の歴史的系統的追求という課題が横たわっており、新鮮な發想と、次から次へと展開される氏獨特の論理には啓發されるところが多い。しかし、軸となる假説を設定する時の史料の捉え方、想定から導き出される結論には推測と飛躍がかなり目につく。『宋會要』の水利田統計から、いきなり江西では一つの水利施設あたりの灌漑面積が少く、簡単な水利設備で農田が維持でき、流民の定着にとつて大きなメリットであったとか、『章貢志』と『同治贛州府志』の比較から、この地域の「陂」の大部分が唐宋時代、流民の手で成立した、といった論證は、必ずしも説得力を持つものではなからう。また、贛商についても、淮南鹽や兩廣鹽と贛州の關係をもう少し、地道に史料に則して究明することが必要だし、贛商と廣南との關係にしても明らかにせねばならぬステップが残っていると思われる。

最後に社會史乃至社會經濟史の四つの論文にふれたい。吉田寅「救荒活民書」と宋代の救荒政策は、南宋半すぎ、浙江瑞安の知縣董燭の著した「救荒活民書」の克明な紹介である。この書に載せられた施策は、董燭の地方官としての體驗に基く現實的視點に立脚し、また古來の救荒政策の資料を爲政者が最も参照しやすい構成で纏めたことは劃期的であるといひ評價を與える。またこの書は、董燭の屬していた南宋政權の舊法的性格の影響を受け、新法黨の救荒

政策に批判的という特色を持つと指摘される。救荒の五大政策といわれる常平・義倉・勸分・禁遏糶・不抑價のうち、特に後三者は、鄉村の構造や商人、地方官僚と關係し、米穀生産、需給の問題とも切り離せぬ。南宋にはこれとかかわる史料が数多く存在する。『活民書』の裏にひそむさまざまな問題を、そうした史料を使ってほりおこななければならぬまい。

竺沙雅章「喫菜事魔について」は同じ著者による「方臘の亂と喫菜事魔」（東洋史研究三二—四）と表裏をなす一篇である。「喫菜事魔」という言葉は、從來マニ教と結びつけて考えられて來た。しかし、喫菜事魔は爲政者側から出た言葉で、マニ教、道教、あるいは佛教の異端派白雲宗、白蓮宗その他俗神信仰すべてが包含され、いわば險惡な反社會的集團として誹謗する時に使われる。從つて元代白蓮教の源流をマニ教に求めんとした吳晗氏などは根本的誤謬を犯している、というのが主旨である。論旨は明快で説得力に富む好論文だが、そうした基本的立場に戻った氏が、どのように南宋に位置づけられるのか、今後の論考を期待したい。

さて、論議を呼びそなた論考が二つ残った。草野靖「宋代奴婢婢妾問題の一斑」から始めよう。最近草野氏は、唐の中期以後、とりわけ江南で開發された園田、圩田などを新田と呼び、それより前から開かれていた田地を古田と分けておられる。この論文は、古田地帯における、主として家内勞働に従事する奴婢を取扱っている。古田地帯では開發の頭打ち、人口増加、均分相續などの結果、家産は零細化し、そのため父母が在世する早い時期に子孫を獨立させる。生分と、家口調節の非常手段である。嫡子が行なわれたと述べら

れる。氏は特に「孺子」の史料を列擧したのち、このため奴婢婢妾の供給源が涸渇し、職業的な男女生口の掠奪買賣が起つたことを福建、江西を中心に説明される。これらのことから草野氏は、貧農佃戸層は本來極めて手近で安價な奴婢供給源である筈なのに、事實はそうでない。つまり地主層は、その家計内に佃戸の營爲を包みこみ、これに干渉を加え、彼らが必要とする奴婢勞働を調達する地位にはなかった。奴婢の不足という觀點からしても、主佃の關係の厳しい對立、佃戸層が厳しく自立を迫られていたことが知られると論じられる。こうした捉え方は今後、議論をよびおこすことであろうが、それはさておき、古田地帶、祖産の零細化、孺子、奴婢不足と掠賣がストリートに繋るであろうか。史料によって跡づけられる大部分の地域は、福建上四郡を中心に、浙江、江西の交界地方に集中しており、その普遍化に躊躇を覚える。草野氏の言われる新田地帶をはじめ、經濟的先進地、都市における奴婢問題が究明されてのち、ここで述べられる氏の論議が生きて来るであろう。

最後は丹喬二「宋代の主戸客戸制と客戸の税負擔」である。次々と發表される主客戸制の論文——その中には丹氏も指摘されるように先人の研究を十分咀嚼していないものもみられるが——を整理、論評されたのち、丹氏は、主戸と客戸を分ける基準は土地を所有するか否かにあり、主戸とは封建地主、自作農、及び自作農で且つ他人の田を租種する佃戸から成っており、これに對して客戸は純粹な佃戸、雇傭人、商工業者であつたと規定される。この點は、例えば私の考えていることと、そう大きな違いはないが、次に、客戸は國家に對して正規に兩税を負担していたと言われると承服できなくなつて来る。丹氏は當時の兩税の對象は土地だけではなく、人丁

も含まれていたもので、ここに土地を持たず人丁のみを有するものが「客戸」として把握される根據があり、主戸客戸制は、兩税及びその他の税役を徵收するために設けられた制度であつたと結論づけられる。この結論は甚だ暗示に富み、私とて全面的に反對というのではない。しかしこれを導かれる論證過程には疑問百出で、この書評のスペースでは提示しきれない。いまは次の一つをあげるにとどめよう。止齋文集卷四十四の桂陽軍告諭納稅榜文をひかれた丹氏が、五等戸以下に夏秋税を除放する、という中に「客戸」が含まれ、従つて客戸は兩税を負担していたと説明されるのもどうかと思うが、それは良いとして、次に「丁辨一年支遣」を「丁ごとに一年の支遣に辨ず」とは、その正税を官兵錢糧にあてることだろうが、「丁ごとに」とあるのは、その正税は夏秋銀錢が人丁と深くかわり合っていることを示すと思われる、と言われるに至つては些か論外の感を受ける。丹氏はここから、丁と客戸と税負擔の論理を展開されて行かれるが、陳傳良の文章を虚心に讀めばこの部分で「丁がとりあげられる必然性はどこにもないのである。果して『永嘉叢書』のテキストでは、丁は丁の誤まりと指摘し、「一年の支出をとどこおりなく辨ずることができ」と素直に筋を通して讀ませている。私も字形の類似から當然「丁」は「丁」の誤まりと見る方に傾く。また、氏が難解だとして苦勞しておられる『雙溪文集』も、四庫珍本三集のテキストをざらになれば、違つた解釋も可能になると思われる。社會經濟史家、とくに一つのテーマを深く掘り下げる人たちは、自己の論理展開に急なあまり、狭い枠の中でしか史料を讀まない通弊に陥りがちである。それに對する注意はいくら強調し、くりかえしてもすぎることはないと思う。

この論文集は宋を對象としても、内容が多岐に亙るため、私の理解に限界があり、著者の眞意を十分に汲みとれなかったのではないかと恐れている。御海容を御願ひする次第である。

(梅原 郁)

Land Taxation in Imperial China, 1750—1911

Yeh-chien Wang (王業鍵)

Harvard University Press

Cambridge, Massachusetts, 1973

(Harvard East Asian Series 73)

著者王業鍵氏は、全漢昇氏の指導の下で（本書は全氏に捧げられたもの）中國經濟史の研究を始め、渡米後 J. K. Fairbank 及び D. H. Perkins 兩氏の下で清代社會經濟史を専攻し、ハーヴァード大學で博士の學位をとられた。現在オハイオの州立ケンント大學で、歴史學の助教授を勤められている。本書の外には以下の業績がある。

「清雍正時期的財政改革」『中央研究院歷史語言研究所集刊』

32 一九六二

“The Impact of the Taiping Rebellion on Population in Southern Kiangsu,” *Papers on China*, 19, 1965

“The Fiscal Importance of the Land Tax during the Ch'ing Period,” *Journal of Asian Studies*, 30, 4, 1971.

(これは本書第四章の原型である)

“The Secular Trend of Prices during the Ch'ing Period,”

『香港中文大學中國文化研究學報』5—2 1973

An Estimate of the Land Tax Collection in China, 1753 and 1908, Cambridge, Mass., East Asian Research Center, Harvard University, 1973. (『清代田賦的一個估計』以下『估計』と記す。詳細は後述)

その他、全漢昇氏との共著で次の論文がある。

「清雍正年間的米價」『中央研究院歷史語言研究所集刊』30、一九五九

本書は著者の以上の業績を前提にして、清代の田賦について主に統計的に研究したものである。

まず全體の概略を知るため、本書の章別構成をみておこう。

序

第一章 清代中國の經濟と財政システム

第二章 田賦行政

第三章 田賦附加税の増大

第四章 田賦の財政的重要性

第五章 田賦の地理的差異

第六章 物價變動と田賦の負擔

第七章 清末の田賦行政の再編成へ

本書の目的を著者は序で次のように言っている。「本書は中華帝國をいくつかの點でよりよく理解するために、清朝特に終りの數十年間の中國田賦問題について研究したものである。第一に田賦システムは、清朝財政システムの最も本質的な特徴を示すものとして重要である。……その上、中國史の相繼ぐ王朝の滅亡は、農民への苛